

カザフの死と葬送に関する新たな研究動向

—D. Jaqan「葬送のフォークロア」を中心に—

藤本 透子

1. はじめに

カザフを対象とする民族学・文化人類学において、死と葬送に関する研究は重要な位置をしめている。すでに19世紀にカザフの死者儀礼はその盛大さから注目されていたが、ソビエト時代には宗教的なテーマであるとして研究が停滞し、1990年代から2000年代にかけて再びさかんに研究されるようになった。例えばロシアでは、現代の都市におけるカザフの葬送などが新たな分析対象とされている [e.g. Stasevich 2009]。カザフスタンでは、人生儀礼の一環として死者の霊魂や葬送に関する詳細な研究が行われ [Tolubayev 1991; Ernazarov 2001, 2003]、19世紀の文献の再版もすすんでいる [Levshin 1996[1832]; Chormanov 2000[1871]]。特に2000年代以降には、都市部出身のカザフ人によってロシア語で出版される研究が多いなか、村落部出身者らによってカザフ語で書かれた論文も少数ながら現れている [Smaghulov 2007; Jaqan 2008]。これらの論文は、カザフ人による新たな自文化研究の動向として注目されるが、カザフ語であるがゆえに優れた成果であっても流通しにくいという難点をかかえている。

こうした現状をふまえて本稿では、カザフの死と葬送にまつわるフォークロア（口頭伝承・口承文学）を豊富なフィールドデータから分析した、デュイセングル・ジャカン（Düysengül Jaqan）のカザフ語論文「葬送のフォークロア」（2008）を紹介する。カザフは元遊牧民として豊かな口頭伝承の伝統をもつため、民族学研究と口頭伝承研究は非常に関係が深い。口頭伝承・口承文学の多様なジャンルのなかで、特に死と葬送に関する研究を行っているのはジャカンのみである。ジャカンは現在、カザフスタン教育科学省 M.O. アウエゾフ文学・芸術研究所フォークロア部門の研究員を務めている。

2. D. Jaqan「葬送のフォークロア」内容紹介

はじめに、著者の背景にふれておきたい。ジャカンは、1964年に南カザフスタン州ソザク地区で牧夫の長女として生まれた。家族が住んだのは広大な草原に位置するソフホーズの

フェルマ（家畜飼育拠点）で、夏には家畜を放牧して天幕に暮らした。こうした環境のもと、カザフ口頭伝承の世界に親しんで育った。例えば子どもの頃のある日、亡くなった祖父の服を祖母が満天の星空のもとに広げているのを見て理由を尋ねると、祖母は「星が（服を）見るように」と答えた。後に研究者となってから、それは本論文中でも言及している「魂の星」であったことに気づいたという。彼女の論文は、19世紀以降のロシア語・カザフ語文献、1980年代以降にカザフスタン西部のマンガスタウ州、南部のクズルオルダ州、南カザフスタン州などで実施したフィールドワーク、そして幼い頃からの体験に根ざしている。研究方法は、言葉の意味を徹底的に読み込む分析と、独自の歴史的再構成を特徴とする。以下では、主要なトピックをいくつかとりあげて紹介する。

2. 1 葬送のフォークロアと死者の靈魂

論文冒頭で著者は、葬送のフォークロアは生とまったく正反対の事象である死に関わるものであるだけに、非常に複雑でたがいに矛盾する多様な規則から構成されていると指摘する。その上で、生のフォークロア研究とは独立した死のフォークロア研究があるべきだと主張し、カザフにとって死と葬送がもつ意味を、以下のように明らかにしていく。

カザフは、死を恐れる必要はなく、生と死の境は不明確で死はひとつの状態から別の状態への移行にすぎないと考えてきた。「死は消滅を意味するのではなく、はじめの世界へと戻ること」なのである。カザフ語で「死んだ」ということを「帰った (qaytis boldi, qaytti)」と表現するのはこのためである。次のようなジョクタウ（死後に歌われる挽歌、論文後半で詳述）にも、回帰としての死の観念が示されている。

「白い鷹は飛び去って湖へと戻った、
金が湧き出る土地へと去った。
白い鷹は道に迷って去っていったのではない、
私たちはみな来たところへと戻る」（フィールドデータ）

ここで、白い鷹は故人の魂を意味しているという。なぜなら「人の魂 (jan) は、古くは生物や物などのかたちをとると理解されていた」からである。例えば、魂の鳥、魂のハエ、魂の蝶、魂の風、魂の影、魂の血、魂の髪、魂の星などの表現がある、と著者は指摘する。

さらに、民族学者 A. トレウバエフのフィールドワークによる研究 [Toleubaev 1991] を引用しながら、人には3つの魂があるとされ、「ハエ魂」は最後の息とともに体の外に出、その後「肉魂」が外に出で体が冷たくなり、最後に「靈魂」が外に出る、すなわち3つの魂のひとつは空へ去り、ひとつは墓、ひとつは家のあたりに残るという観念があると指摘する。この魂と身体分離という考え方は、著者自身が採取した「魂は夏営地へと行った、体は地

に横たわっていても……」などの叙事詩の一節にも示されているという。

死者の魂は死なないという考え方が最もはじめに生じ、やがて父祖の靈魂が生者に影響を与えるという祖先信仰に続き、そこに一神教であるイスラームが重なっていったと著者はみなす。これらの観念は、現代における葬送のフォークロアに混在しているという。例えば、「死者が安らがなければ、生者は豊かにならない」という現在もよく使われるカザフのことわざは、父系クランのアクサカル（長老）が社会の実権を握った時代の父祖の靈魂の観念と関係しているという。イスラームが優勢になるにつれて、死者の靈魂の信仰は、断片的なかたちでフォークロアのなかに残ったのだと著者は述べている。

2. 2 死者と語り合うジョクタウ—言葉と血と髪のかち

死者の靈魂の観念とともに、「言葉によって死者と話すことができる」という「言葉のかち」の信仰もまた、現代における葬送のフォークロアにみられると著者は指摘する。「死者には生者の声が聞こえるので、泣かなくてはならない」とされ、死者に呼びかける言葉は死者との関係によって、父よ、姉よ、妹よ、など変化する。例えば夫を亡くした妻が、

「残された子どもたちを、あなたは誰に託していったの？」

と嘆いて泣くと、親族がそれに加わって次のように言う。

「親族たちがあなたのそばに来て座っています。

頭をもう一度上げて（起きて）ください、世帯主よ」

また、母を亡くした子どもたちは次のように言う。

「頭を上げて、魂の母よ、

子どもたちがあなたを恋しく思ってやってきました」（フィールドデータ）

著者によると、嘆きの言葉とともに声を上げて泣く習慣は、髪や血といった身体の一部に呪術的意味を認める信仰とも結びついている。かつてカザフ女性は髪を三つ編にしていたが、死者の妻や娘は三つ編をほどいて髪を振り乱し、7日忌まで結わずに悲嘆を表した。

「真っ白い髪をほどき、

私はお下げ髪ではなくなってしまった」（フィールドデータ）

というジョクタウは、このことを指しているという。さらに、死者の妻や娘は、家を7回まわると顔に爪で引っかけて傷つけ、血を出すことで死を悼んだという。

「目にあふれる血の涙、袖に注がれる」(フィールドデータ)

と歌われるように、血と涙を流したのである。イスラームの観念では「自分の体を傷つけてはならない」ため現在では行われないが、フォークロアとして伝えられている。

古くから伝わる表現を用いながら即興でジョクタウ、すなわち挽歌を歌うことは、かつてはカザフ女性の義務とされ、現在でもカザフスタンの特定の地域では行われているという。ジョクタウには独特の発声法と節回しがあり、朝も晩もその旋律にのせて歌う。

ジョクタウの内容は、葬送の段階にあわせて変化する。死から埋葬までは、嘆きながら「死者と語り合う」ことが目的で、埋葬後には「悲嘆」よりも「死の受け入れ」が中心的主題となる。古くは、1年忌まで弔問客が来るたびにジョクタウが歌われた。ジョクタウを構成する要素は、①死者を父祖の系譜から語る、②順序だてて死者の人生を描く、③歌の理由(死)を描く、④残されたものたちの悲嘆を描く、⑤子孫が希望を持ち生に感謝するようにと歌う、の5つであると、著者は指摘する。

ジョクタウの具体的な内容は、死者によっても異なる。例えば、婚約者が死んだ場合、娘は次のようなジョクタウを歌ったと伝えられる。

「ヒツジの群れは来たのにあなたは来ない、
なぜ一緒に遊牧にでなかったの？
崩れ落ちた白い天幕の、
何を私は喜ばばよいの？」(フィールドデータ)

社会貢献をした人のジョクタウには、カザフ民族が経験した歴史的出来事も含まれる。そうしたジョクタウは、社会的意義をもつため今日まで伝えられているのだという。ジョクタウを歌うこと・聞くことは、カザフ社会で非常に重視されていたと著者は指摘している。

2.3 「死者の国への旅」とイスラームの「天国」概念

葬送のフォークロアにみられる「古い信仰」を分析しながら、イスラームとの関係性にも著者は着目する。例えば、クルアーン朗唱について、

「死者はさすらい人、
待っている、唱えられるクルアーンの章節を。」
「墓には光が広がり、
墓の周りではヨナキツグミが歌うように。
クルアーンが唱えられ、

私の大切な人がご利益を受けるように。」(フィールドデータ)

などクルアーン朗唱が死者の状態を左右するとする観念は、「言葉の呪力」の信仰とイスラームの結びつきによって生れたと著者はみなしている。

さらに、「死者は新たな世界への旅人」とされ、「死者の国」はイスラームの「天国」概念と重ねあわさっていったと著者は指摘する。「死者の国」は、冒頭で述べたように「はじめの世界」への回帰としても語られるが、

「私を守ってくれる人が地の下へと落ちた後、
悲嘆に出来ないどのような術があるというのだろう。」(フィールドデータ)

というジョクタウの一節にみられるように、地下にあるとも考えられていたという。「あの世は西方にある」ともいわれ、死者の頭を西方へ向けるのはこれに関連するという。また、父系クランの墓地があることは、この世の暮らしがあな世でも続くとする古い信仰に基づくという。すなわち、「生きている時に近くに住んでいた親族と、死後の世界でもともに暮らす」のである。「自分の自由で去ったのではなく、父祖が(死後の世界へと)招いたのだろう」というジョクタウは、父祖の靈魂が生者に影響を与えるという観念を示すという。

一方、イスラームの観念では、「魂は人にアッラーから一時的に与えられたもので、すべてを創造されたアッラーが死も創造した」とされると著者は述べる。「埋葬した日の夜にクルアーンの章節を唱える目的は、質問を受けている死者を助け、死者の罪が許されるよう願うこと」である。死者が「天国」に行くという概念は、

「あなた(死者)の靈魂が、預言者と友となるように」
「母をあなた(アッラー)に頼んだ、
あなたの庇護を、唯一のアッラーよ」(フィールドデータ)

などの表現に顕著にみられるという。

イスラームの浸透とともに、死者の衣服を家の中につるす、死者の槍を折る、死者のウマを1年忌に屠る、1年忌に最後のジョクタウを歌って泣くなどの「深く悲しむしきたり」は消滅した。しかし、特に若くして亡くなったような場合、いかなる制限・禁止があろうとも、死の重い悲しみと嘆きが表現される。シャリーアは、人々の間の古い信仰のすべてを禁じて消滅させることはできなかったのだと、著者は指摘している。

2. 4 現代における葬送のフォークロアの変化

論文の最後で著者は、死の概念の変化にともなって、葬送のフォークロアの役割はいま

いになったと述べている。「ソビエト的生活習慣を強化する」という思想の下で伝統や習慣を撲滅する闘争が行われた時代に、葬送は特に変化をこうむった。現在では、ジョクタウを歌わずに遺体を葬ることも多い。特定の地域ではジョクタウを歌って泣く伝統が保たれているが、それは個人や家族が死者への追悼の気持ちを示すだけのものになったという。「葬送のフォークロアは狭められ、悲嘆を表現するという意味だけが残った」のである。服喪の習慣も変化し、家族ができる範囲で、集まる人々の時間的余裕を考慮し、複数の儀礼を同日に行うこともあるという。

しかし、「悲嘆は分ければ減り、喜びは分ければ増える」というカザフ語の表現があるように、葬送のフォークロアは、悲嘆にくれる人の心をとらえて危機的状況を脱することを助け、死者の前で義務を果たす方法として今も重要だと著者は言う。現在、特に都市では、葬送音楽、追悼式典、多数の人々を招待して食事をふるまう、記念碑を建てる、追悼文を書くなど、葬送の習慣の新たな形態もみられると指摘して、著者は論文を結んでいる。

3. おわりに—成果と課題

以上の D. Jaqan の論文は、カザフ人でなければなかなか困難な口頭伝承のフィールドにおける採録と、その詳細な読み込みを行った点で、非常に優れた研究といえよう。ここでは十分に紹介できなかったが、クラーンの章節の内容とカザフ語口頭伝承の比較検討も一部に含まれ、ソビエト時代には困難だった宗教研究という側面ももっている。葬送儀礼自体に関する記述もあり、民族学研究としても価値が高い。

その一方で、ソビエト時代の発展史観を想起させる歴史的再構成の手法は、実証性の観点からやや問題も残るように思われる。また、カザフ語でカザフ人に対して書かれた論文であるため、カザフの葬送に関する予備知識がなければわかりづらい。フィールドで採録したフォークロアも、採録した地域と年代の記述がほしかった。

しかし、非常に複雑で矛盾をはらむイスラームと祖先信仰と死者の靈魂に関わる概念の関係性を、現代のフォークロアをとおして精緻に明らかにしたことは、ほかの論文にはない特徴である。死者の靈魂が生者に影響を与えるという観念が現代にも生き続けるがゆえに、死者にあまりに深くかかわるべきではないとされ、死と葬送はカザフのあいだで研究テーマになりにくいともいう。D. Jaqan の論文はその難しい課題にあえて取り組んだものであり、今後の新たな研究の可能性が期待される。

カザフスタンにおける民族学およびその周辺分野では、19世紀から20世紀初頭を中心に「伝統」が研究される傾向が続いているが、D. Jaqan のこの論文を含めて、現代の変容にふれたり、現代を主要テーマとする研究も若い世代によって少しずつ現れるようになっている。また、ロシアの複数の研究者によっても、ロシアのカザフ人を対象に現代における社会変容

が民族学研究の主題として中心的にあつかわれるようになってきている。こうした新たな研究動向をふまえながら、現代中央アジアの社会的・文化的・宗教的動態にせまっていくことが必要とされているといえよう。

参考文献

Chormanov, M. K (Чорманов М. К.)

2000(1871) Поминки по усопшим // Казахские народные обычаи / Под ред. Ж. О. Артыкбаева. Караганда: Арко. С. 21–23.

Ernazarov, Zh. T. (Ерназаров Ж. Т.)

2001 Особенности погребально-поминальной обрядности казахов западного Казахстана // Обычаи и обряды казахов в прошлом и настоящем / Гл. Ред. С. Е. Ажигали. Алматы: Ғылым. С. 324–346.

2003 Семейная обрядность казахов: Символ и ритуал. Алматы: Центр истории и археологии.

Jaqan, Düyseñgöl (Жақан, Дүйсенгүл)

2008 Жерлеу ғұрпының фольклоры // Қазақ фольклорының тарихы. / Под ред. Сейіт Қасқабасов. Алматы: «Қаз Ақпарат». 124–147 б.

Levshin, A. I. (Левшин А. И.)

1996 (1832) Описание киргиз-казачьих, или киргиз-кайсацких, орд и степей / Под ред. М. К. Козыбаева. Алматы: Санат.

Smaghūlov, E. M. (Смағұлов Е. М.)

2007 Қазақтың ас беру дәстүрі: әлеуметтік-саяси қызметі (XVIII-XIX ғғ. деректері бойынша). Алматы: Тарих ғылымдарының кандидаты ғылыми дәрежесін алу үшін дайындалған диссертацияның авторефераты.

Stasevich, I. V. (Стасевич, И. В.)

2009 К вопросу о трансформации погребально-поминальной обрядности казахов в современных городских условиях // Лавровский сборник: Материалы XXXIII Среднеазиатско- Кавказских чтений 2008-2009 гг. (Этнология, археология, культурология). Санкт-Петербург: РИО МАЭ РАН. С.279–285.

Toleubaev, A. T. (Толубаев А. Т.)

1991 Реликты доисламских верований и семейной обрядности казахов. (XIX – начало XX в.). Алма-Ата: Ғылым.

(国立民族学博物館・機関研究員)